

令和2年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 4	公益目的事業 16
主査名	谷口綾子 筑波大学教授	
研究テーマ	新しい道路交通システムの社会的受容の包括的理解に向けた学際研究	
研究の目的： 本研究では、新しい道路交通システムの社会的受容性を、 (1)交通工学・心理学・倫理学・宗教学・メディア学といった様々な学問分野の切り口から定量的／定性的に把握 (2)19世紀末に導入されたかつての新交通モード「クルマ」の社会的受容を民俗学・法歴史学の観点で辿ることで把握 する。これらより、AVsが社会や文化にもたらすであろう影響を可視化し、AVsを社会にソフトランディングさせる一助とすることが本研究の目的である。		
研究の経過（4月～3月）： 以下のサブテーマの研究を進めた。 (1)メディアによるAVs関連の報道の質的变化 (2)AVs開発・導入に当たっての論調への賛成度の日独英比較 (3)AVsのNIMBY問題(Not In My Back Yard)に関する三カ国比較 (4)自動車関連の法制度の社会、歴史的経緯の文献調査 (5)AVsの倫理的課題について、大学生の判断と理由の質的分析 また、以下のとおり研究会を開催し、研究メンバー間の情報共有と議論を行った。 ・2020年7月4日 @筑波大学東京キャンパス ・2021年3月13日@東京大学柏の葉キャンパスの自動運転バスの試乗会運営補助 ・2021年3月14日@筑波大学つくばキャンパス ・2021年3月15日@境町 自動運転バスの視察、町長・関係者へのヒアリング調査 ・2021年3月20日@東京大学柏の葉キャンパスにおける市民フォーラムへの登壇と運営補助		
研究の成果（自己評価含む）： (1)メディアによるAVs関連の報道について、読売新聞記事より抽出し、取りまとめて10月初旬締め切りの土木計画学研究発表会の講演集に投稿した。記事の初出は1989年、2019年までを調査対象とした。 (2)2020年5月に実施した日独英三カ国対象のAVs社会的受容調査(調査は別予算)において、AVs開発・導入に当たっての論調に着目した分析を行った。日本では「規制緩和」、ドイツでは「気候変動(地球温暖化防止)」がキーワードになっている可能性が示された。 (3)(2)と同じ調査において、AVsのNIMBY問題(Not In My Back Yard)に関する三カ国比較分析を行った。日本人はNIMBY度合いがドイツ人、英国人よりも強い傾向が示された。 (4)自動車関連の法制度の社会、歴史的経緯について「道路交通問題研究会編 道路交通政策史概観」の文献調査により、取りまとめている。		

令和2年度研究プロジェクト研究概要報告

- (5) AVsの倫理的課題について、2020年度は「AVsは歩行者の交通違反を想定すべきか」「AVsの社会的実装に向けて、どの程度の安全性が確保されるべきか」という二つの問いにしぼり、大学生を対象とした調査データを用いて、その判断と理由について質的に分析中である。
- (6) 柏市柏の葉地区における自動運転バスの社会的受容醸成を目的とした市民フォーラムにおいて、運営補助を行うとともに、参加者へのヒアリング調査を行った。現在成果を取りまとめ中である。
- (7) 2020年11月下旬より運行が開始された茨城県境町の自動運転バスシステムの視察と、町長・バス運行事業者のボードリー社長、境町のインフルエンサーの方々にヒアリング調査を行い、その結果を取りまとめた。今後、境町の自動運転バスに対する町民の意識やシビックプライドの度合いを計測する予定である。

今後の課題：

これまでは個別事例では無く、自動運転システムの社会的受容性の一般化をモデルや新聞調査などで実施してきた。次年度以降は、自動運転システムが導入されている個別の地域に着目し、地域の歴史文化や文脈、住民の自動運転バスに対するエピソードを収集することで「地域のストーリー」をつくり、そのストーリーを共有する仕組みを検討したい。これにより、自動運転バスという地域の装置が、住民の地域愛着やシビックプライドを醸成する一助となり得るのかを把握したい。